

平成 25 年度企画展

江戸時代の須賀

期間 平成 26 年 3 月 15 日 (土)

平成 26 年 5 月 11 日 (日)

休館日 3 月 17・24・25・31 日

4 月 7・14・21・28・30 日

5 月 7・8 日



宮代町郷土資料館

345-0817

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原 289

TEL 0480-34-8882 FAX0480-32-5601

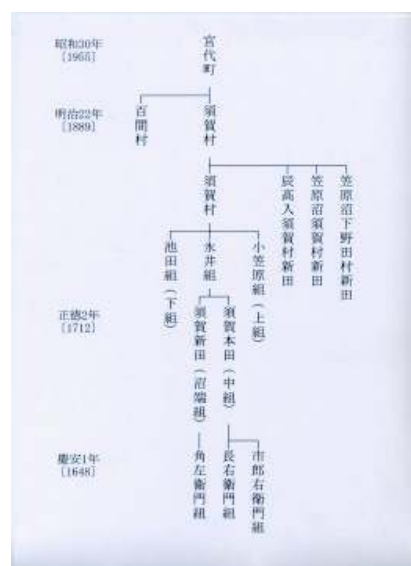
今回の企画展はこれらの古文書の中から須賀村にスポットをあて、江戸時代の須賀村について詳しく解説します。なお、江戸時代の須賀村は現在の大字須賀だけでなく学園台や本田の大部分もその範囲でした。

展示内容は、江戸時代の須賀村内の様子や村役人の変遷などで当時の須賀村の状況が分かるように展示いたしました。併せて、江戸時代以前の須賀や明治以降の須賀についても触れ、縄文土器や土師器などの遺跡から出土した遺物も展示しています。是非ご覧下さい。



平成 26 年 3 月 15 日

宮代町郷土資料館



須賀村の系譜

1. 本書は平成 26 年 3 月 15 日から 5 月 11 日にかけて開催する宮代町郷土資料館企画展「江戸時代の須賀」の展示図録です。
2. 本書並びに展示した写真は、当館学芸員河井伸一が撮影しました。
3. 本展示会の企画及び執筆・編集は河井伸一が担当しました。展示は資料館職員等が協力して行いました。
4. 資料提供・協力者等（順不同・敬称略）

戸田義一、渡邊文雄、石橋孝夫、岩崎光子、戸田ふく、高畑富治、中村豊、實松幸男

江戸時代以前の須賀

須賀に人々が確実に生活していたのは、縄文時代前期初頭（約 6,000 年前）からです。その後、縄文時代後期（約 3,500 年前）までは住んでいたようですが、それ以後は人々の生活の跡を確認することはできません。古墳時代後期（約 1,500 年前）になると古利根川の氾濫などにより自然堤防が発達し、人々の生活の跡が確認できるようになります。鎌倉時代に入ると須賀は、幕府の正史『吾妻鏡』にも記載されるようになり、利根川を渡る高野の渡しと共に幕府にとって重要な場所でした。

縄文時代の須賀

須賀で遺跡が確認されているのは身代神社の東側の住宅地である身代神社遺跡と東武伊勢崎線踏切北側の須賀遺跡のみです。身代神社遺跡では、昭和 49 年の学園台団地造成にあたって行われた発掘調査で縄文時代早期前半（約 8,000 年前）の土器が 1 点見つかっています。多量に土器が見つかる時代は縄文時代前期初頭（約 6,000 年前）です。住居跡は発見されませんでした。土坑と呼ばれる当時の人々が掘った穴が見つかります。

古墳時代から平安時代の須賀

須賀で古墳時代、奈良時代、平安時代の遺跡が確認されているのは縄文時代と同じく須賀遺跡と身代神社遺跡の 2 か所のみです。身代神社遺跡では祭礼に使われた滑石製の臼玉や須恵器（すえき）と呼ばれる高温で焼かれた灰色の土器も出土しています。一方、須賀遺跡では昭和 62 年度に町道万願寺橋通り線建設に伴い行われた試掘調査で、復元できる古墳時代後期の土師器（はじき）や投網の錘（おもり）に利用したと言われる土錘（どすい）が出土しました。



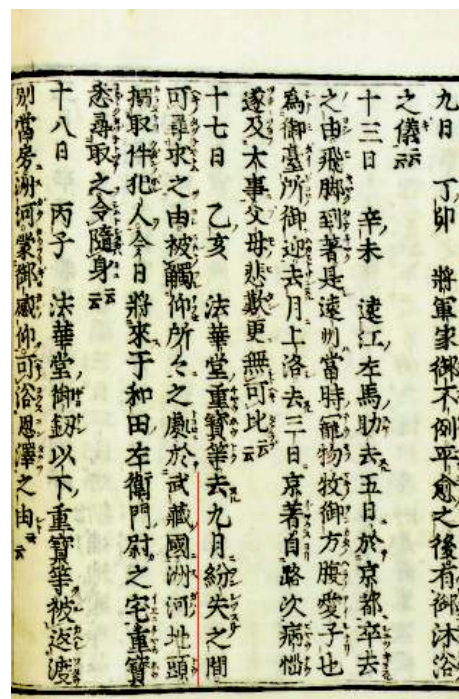
身代神社遺跡から出土した約 6,000 年前の土器



須賀遺跡から出土した土師器

鎌倉時代の須賀

史料で初めて須賀が確認できるのは『吾妻鑑』です。寿永2年（1183）に源頼朝の叔父である志田義広は頼朝に反旗を翻し鎌倉を攻撃しようとしたのですが、頼朝の家臣であった小山朝政は奇襲しこれを破りました。この時、頼朝は敗走する義広の残党を打ち取るため、古河渡しと高野渡しを固めるよう命じています。次も『吾妻鑑』で元久元年（1204）に鎌倉の法華堂の宝物が盗み取られましたが須賀の地頭（領主）により捕えられたと記されています。元亨4年（1324）には鎌倉幕府から称名寺に対し「高野川の橋については前の通り認める」との文書が出されています。



吾妻鑑 武蔵国洲河地頭

室町時代・戦国時代の須賀

室町時代に入ると小山朝政の子孫である小山義政は、永徳2年（1382）に室町将軍家の分家である鎌倉公方足利氏満に反乱を起こし所領を没収されました。この戦乱の恩賞として、安保憲光に須賀郷半分が与えられたようです。恐らく須賀郷は上須賀郷と下須賀郷とで構成されていたと推定されますので、小山義政の上須賀郷が安保憲光に須賀郷半分として渡されたと推定されます。その後、応永2年（1395）にはこの須賀郷半分の代わりとして下妻荘内の小島郷（茨城県下妻市）が与えられました。こうして、小山氏や安保氏による須賀郷の支配は終わりました。

この他に須賀が確認できる史料として「市場之祭文」があります。これは、延文6年（1361）時点での太田荘や騎西郡（行田市、加須市、久喜市、蓮田市、白岡市、岩槻区、越谷市、八潮市）、足立郡（さいたま市、鴻巣市、上尾市、川口市）等での市場の所在地が分かるものです。ここに、久米原市や春日部郷市と共に須賀市が記載されています。

戦国時代になると須賀は全く資料に表れませんが、天正20年（1592）には百間郷の一部であったようですので、戦国時代後半は和戸郷や久米原郷と共に岩付城主の太田資正（太田道灌の子孫）や北条氏房（北条早雲の子孫）の支配下にあったと推定されます。

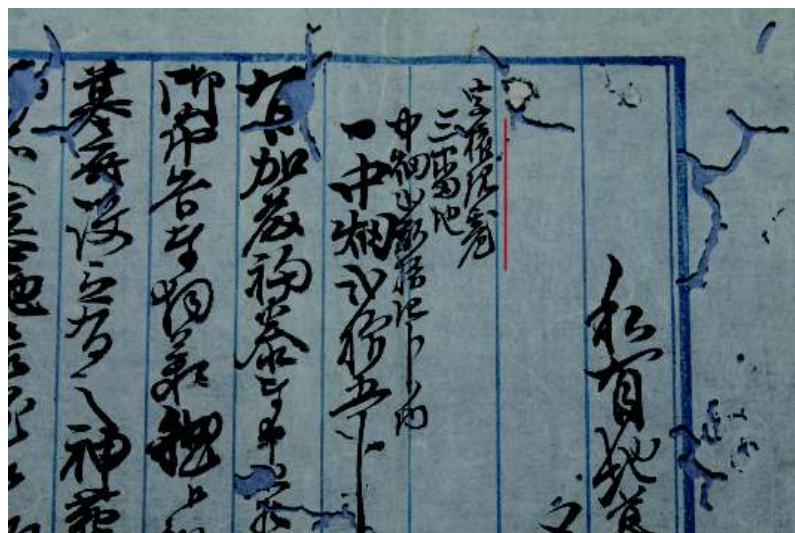
鎌倉街道

鎌倉街道は、将軍と御家人とが主従関係を結び、鎌倉の非常時に馳せ参じるために造られました。鎌倉街道は、大きく上道、中道、下道に分かれています。須賀を通る街道は、中道（なかつみち）と呼ばれ、東北方面から古河（茨城県古河市）を経て、高野、須賀、久米原、高岩、野田、太田新井、岩槻、鳩ヶ谷、川口から新宿（新宿区）、戸塚（横浜市）を経て鎌倉に至りました。

宮代町の鎌倉街道では、発掘調査が2回行われています。いずれも東条原字宿屋敷で行われました。平成14年度の発掘調査では伝承鎌倉街道沿いから、溝状の道路状遺構が検出されました。平成17年の発掘調査では、厚さ約30cmに渡り造成した道路状遺構が発掘されました。なお、須賀遺跡では平成11年に鎌倉街道付近を試掘調査しましたが、何も発見されませんでした。

須賀村内には権現台と言う地名が残っていました。そこには徳川家康を祀った東照社がありました。家康が上杉景勝を討つために小山城へ向かう時休んだ場所と伝わっています。

字権現台と書かれた古文書
渡辺家文書



須賀郷

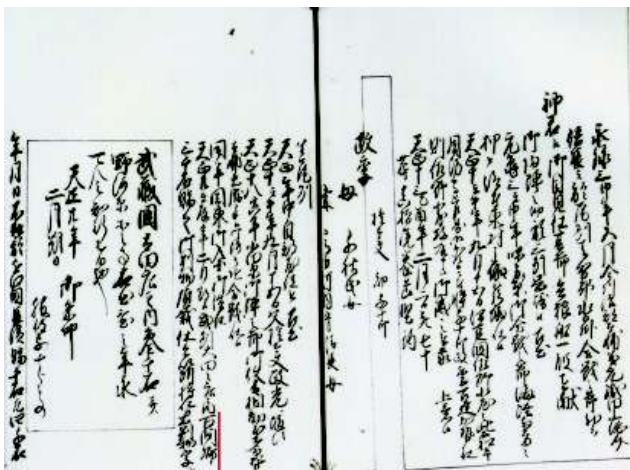
鎌倉時代から室町時代にかけて、須賀郷は上須賀郷と下須賀郷に分かれていました。江戸時代初期には須賀村は本村(須賀上、須賀下)、前須賀(金剛寺)、八左衛門島(須賀島)、新田(辰新田)で構成されていました。この内、八左衛門島と新田は新たに造られた集落であるため、元々の集落は本村と前須賀のみです。このことから、上須賀郷と下須賀郷は本村と前須賀にあてはめられると推定されます。一般的に北側を上、南側を下としますので、本村が上須賀郷、前須賀が下須賀郷の可能性があると言えるでしょう。

太田荘百間郷と須賀村

天正18年(1590)、関東を支配していた小田原北条氏は滅亡し、徳川家康が駿府(静岡市)から江戸へ入府しました。これに伴い家康の家臣であった服部政季は太田荘百間郷3,000石を与えられました。この時の須賀村は太田荘百間郷の範囲に含まれていました。

元和5年(1619)に服部政季の息子の政信が遠江国敷知郡(静岡県浜松市周辺)へ移されると、百間村と須賀村は分けられ、それぞれで検地が行われました。この検地が行われた頃には、須賀村は事実上大きく分けて須賀村と須賀新田に分かれていたようです。「本田帳」と呼ばれる検地帳は須賀村全体の検地帳から須賀新田のみを抽出しています。後の旗本永井氏と旗本池田氏の領地の一部です。

なお、服部政季、政信父子の陣屋は宮代町字西原地内に置かれたようです。現在の青林寺からその東側一帯と推定され、多くの陶磁器や土器、堀や建物跡が発掘されています。



諸家系譜(服部) 百間郷 内閣文庫

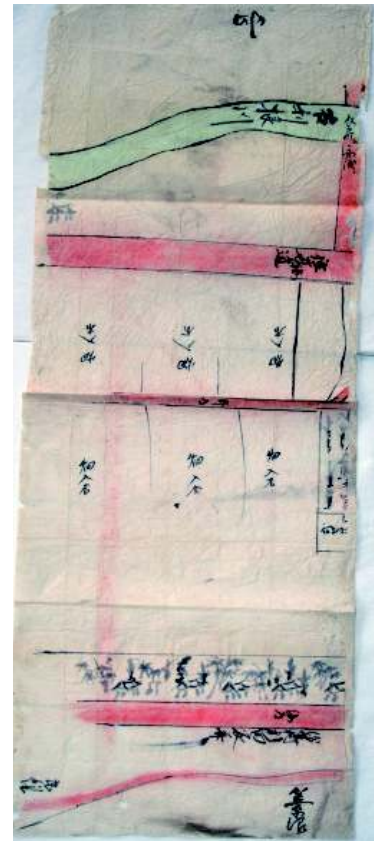


旗本服部氏の陣屋跡 掘立柱建物跡
宮代町字西原

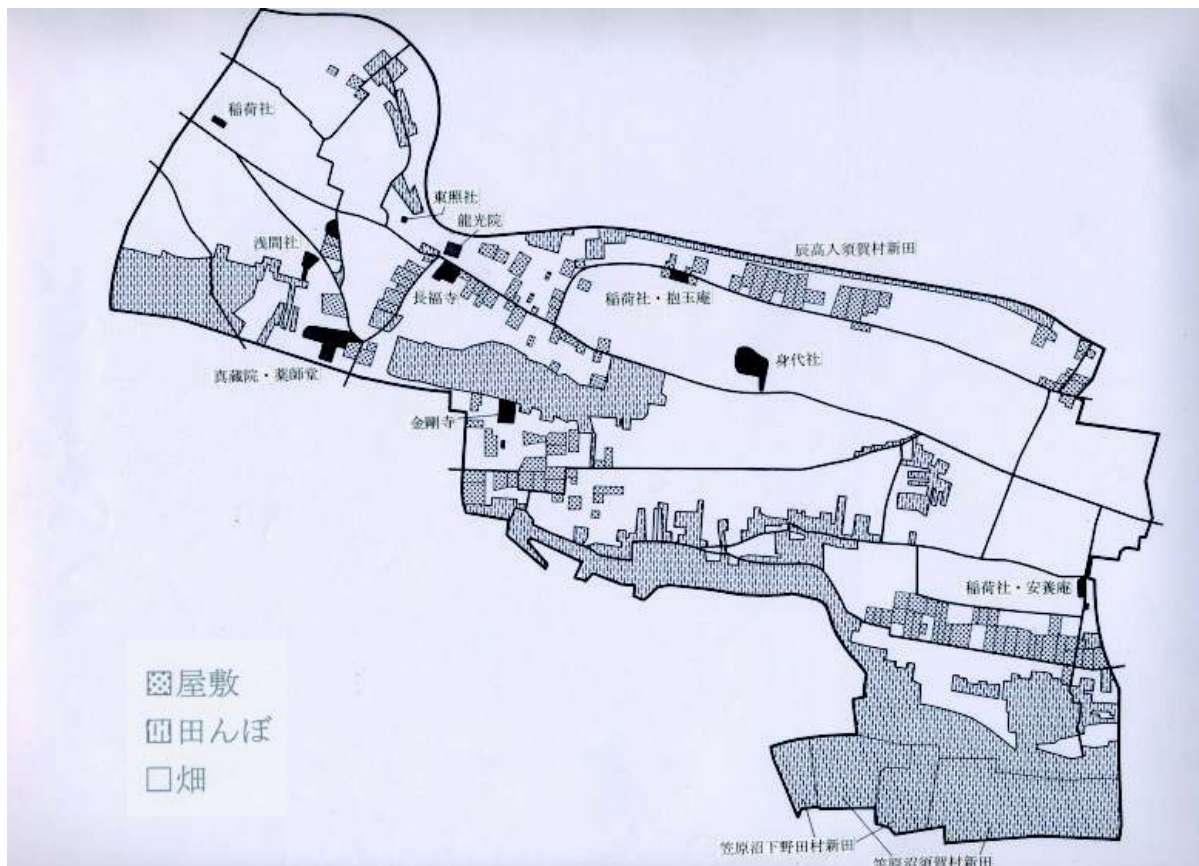
須賀村について

江戸時代の須賀村は百間須賀村とも呼ばれ、現在の大字須賀、学園台1～3丁目、本田1・2・4・5丁目、百間1丁目の一部が範囲の村でした。元和5年（1619）では戸数49軒、文政12年（1829）では戸数125軒、人口634人、明治9年（1876）では戸数149軒、人口758人、明治22年には人口833人、昭和45年では（1970）では人口2,089人、平成25年（2013）では人口4,801人、戸数2,078軒を数えます。

須賀村は明治8年に持添新田である笠原沼須賀村新田、笠原沼下野田村新田、辰高入須賀村新田を吸収し、明治22年に東条原村や西条原村、和戸村、国納村と合併し新たな須賀村となりました。この時の人口は2,603人でした。昭和30年には百間村と合併し、宮代町が誕生します。この時の人口は10,755人でした。ちなみに現在の宮代町の人口は33,179人です。



須賀村絵図
戸田家文書



須賀村全図

須賀村の領主

寛永元年（1624）、須賀村は岩槻藩阿倍備中守正次、旗本池田帯刀長賢、旗本永井豊前守直貞に領地が分割されました。その後、岩槻藩阿倍氏領は、天和元年（1681）板倉重種に受け継がれますが、すぐに蟄居となり、天和2年に戸田忠昌領となりました。さらに、4年後の貞享3年（1686）には松平忠周領となり、元禄10年（1688）には小笠原長重領となりました。この時、百間村の内、後の百間西原組（宮代町字西原）と百間金谷原組（宮代町字金原）も岩槻藩小笠原氏領となっています。なお、西条原村は天正20年（1592）以来、岩槻藩領でした。その後、正徳元年（1711）には長重の子長熙が遠江国掛川城に移封され、天領（幕府直轄領）に戻りました。元文2年（1737）、この天領は旗本小笠原長規に与えられ、幕末まで変わりませんでした。

一方、旗本永井氏と旗本池田氏の知行地も幕末まで変わりませんでした。笠原沼須賀村新田と笠原沼下野田村新田は、いずれも享保14年（1729）の開発で享保19年（1734）に検地が行われました。笠原沼下野田村新田は終始天領でしたが、笠原沼須賀村新田は明和7年（1770）に川越藩松平大和守領となり、文政4年（1807）に天領に戻りました。この他、天領として古利根川の流作場新田としての辰高入須賀村新田がありました。

名主と村役人

村役人とは、一般的に名主・組頭・百姓代をいいます。名主は基本的には、村や領主ごとに1名でしたが、2名以上いる場合もあります。

須賀村の名主や組頭が分かる最も古いものは、慶安元年（1648）の年貢割付状で市郎右衛門、長右衛門、角左衛門が見られます。この史料からこの当時、旗本永井氏の須賀村に3人の名主がいたことが分かります。次も旗本永井氏の須賀村で天和2年（1682）の年貢割付状に安左衛門、八郎兵衛、一郎右衛門の3名が記載されます。旗本永井氏以外の領主で名主が確認できる最も古いものは、享保13年（1728）の史料に天領の名主庄右衛門、旗本池田氏の名主源七が認められます。この他、旗本永井氏の須賀村では須賀本田の名主として加右衛門、須賀新田の名主として政右衛門が見られます。これらのことから、須賀村は旗本小笠原氏（元岩槻藩領）の須賀村、旗本池田氏の須賀村、旗本永井氏の須賀本田と須賀新田の四組に分かれ、それぞれ名主や村役人がいたようです。この他、笠原沼須賀村新田、笠原沼下野田村新田、辰高入須賀村新田でもその新田に耕作地を持つものが村役人を組織していました。

■ 須賀村内の組

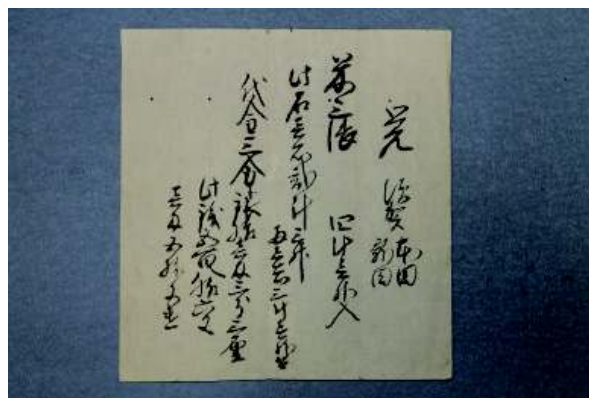
領主別の組としては小笠原組、池田組、永井組が確認できます。さらに、旗本永井氏の須賀村では慶安元年（1648）には市郎右衛門組、長右衛門組、角左衛門組の3組が、正徳2年（1712）からは須賀本田と須賀新田が見られます。水利や助郷など村全体に掛かる内容については各組が年番で、さらには旗本永井氏の知行地では格番で行っていたようです。

領主別の組の他に上組・下組・中組・沼端（新田）組が、中組と沼端組を合わせ中沼組という組も見られます。村役人等を丹念に調べていくと領主別の組と上組等が同じであることが分かりました。旗本小笠原氏と関係のある組を上組、旗本池田氏と関係のある組を下組、旗本永井氏の内須賀本田を中組、須賀新田を沼端（新田）組と呼んでいたようです。

領主による組分けの他、居住している場所による組分けも石造物や古文書で確認できます。耕地や株などと呼ばれる組で上株（耕地）、下株（耕地）、前須賀株（耕地）、島株（耕地）、沼端（新田）株（耕地）などです。これは、現在の行政区とほぼ同じと言えます。

■ 旗本永井氏の須賀本田と須賀新田の成立

旗本永井氏の須賀村では、元和5年（1619）の検地の頃から3組に分かれていたと推定されます。慶安元年（1648）には市郎右衛門組、長右衛門組、角左衛門組の3組がありました。それぞれ、91石3斗5升8合、99石3斗8升1合、109石2斗6升1合でした。宝永4年（1707）までは3人の名主が見られますが、正徳2年（1712）には加右衛門組（市郎右衛門組）と安太夫組（長右衛門組）は合併し須賀本田に、権兵衛組（角左衛門組）は須賀新田になりました。こうして、須賀本田と須賀新田が成立しました。須賀本田と須賀新田は、それぞれで村役人を組織しており、助郷役や水利関係等は交代で行っていましたが、年貢は須賀村300石として、一緒に旗本永井氏に納入していました。しかし、享保16年（1731）の村方争論の後、須賀本田と須賀新田は別々に旗本永井氏に年貢を納入することになりました。



米納入金覚 戸田家文書
須賀本田、須賀新田が記載される

旗本永井氏の須賀本田の名主

須賀本田の名主は、宝永3年（1706）では、須賀下耕地の石橋加右衛門でした。享保10年（1725）2月に名主退役願いを旗本永井氏に提出しているため、これまで名主役を勤めていたと推定されます。その後、享保10年5月、加右衛門の二男伴右衛門が名主役を引き継ぎました。そして、安永7年（1778）まで2代にわたり伴右衛門が名主を勤め、天明2年（1782）12月までに娘婿の勘右衛門が名主を引き継ぎました。勘右衛門は寛政6年（1794）まで名主として確認できます。

その後、寛政7年（1795）12月には金剛寺耕地の岡野兵四郎が名主でした。兵四郎は天保9年（1838）まで名主として確認できるため、数代に渡り名主役を勤めたと推定されます。天保10年（1839）から嘉永3年（1850）までは金剛寺耕地の貞左衛門が名主として確認できますが、姓は不明です。

安政元年（1854）には名主は中村平左衛門でした。その後、安政5年（1858）から慶応2年（1866）までは、子の平兵衛が名主を勤めていました。孫の牧太郎は明治2年（1869）に年番名主、明治3年には名主として確認でき、明治17年まで須賀村の戸長を勤めました。近年まで須賀島耕地の居宅跡付近には大型の宝篋印塔が残っていました。明治3年には中村林蔵も年番名主として見られます。林蔵の子孫が後に須賀村長を勤める中村金次郎です。林蔵も須賀島耕地に居住していました。

旗本永井氏の須賀新田の名主

旗本永井氏の須賀新田の名主として確認できる最も古い名前は、慶安元年（1648）の角左衛門です。その後、宝永3年（1706）までは須田九右衛門が名主を勤めてきました。その後、名主は戸田権兵衛に代わりました。正徳5年（1715）12月には、権兵衛の子の政右衛門が名主として確認できます。その後、明和9年（1772）まで数代に渡り政右衛門が名主を勤めていたと推定されます。

安永5年（1776）組頭の鈴木友右衛門が名主役を引き継ぎました。次に名主として確認できるのは天明元年（1781）の武右衛門ですが姓は不明です。その次に名主として確認できるのは、寛政元年（1789）から文化元年（1804）までの友右衛門の子の伝右衛門です。文化3年（1806）から文化10年（1813）までは、その子の惣右衛門が名主を勤めました。文化13年（1816）からは名主役は確認できなく、年番で組頭が名主代を勤めたようです。文政11年（1828）から天保13年（1842）までは惣右衛門の子の兵助が名主役を勤めたようです。伝承では戸田家の後の名主は屋号「ヒョウ（兵）ナヌシ」の鈴木家であったと伝わっています。なお、須賀新田の住民は全員沼端耕地（辰新田）に居住しています。

旗本池田氏の須賀村の名主

旗本池田氏の須賀村の名主として最も古い名前は、享保7年（1722）の須賀下耕地の中村源七です。享保13年（1728）まで名主として確認できます。次に、名主として確認できるのは義左衛門です。享保16年（1731）から元文6年（1741）まで勤めました。その後、寛保3年（1743）には太兵衛、延享2年（1745）には義左衛門、延享4年（1747）には須賀島耕地の中村浅右衛門、寛延3年（1750）6月には義左衛門、同じく12月には浅右衛門が名主でした。寛保3年（1743）から寛延3年（1750）にかけては組頭クラスによる年番で名主役を勤めていたと推定されます。寛延3年（1750）以降、嘉永元年（1848）まで約100年、中村浅右衛門は数代に渡り名主役を勤めました。

その後、嘉永6年（1853）以降は、中村又兵衛や中村浅右衛門の組頭が年番で名主役を勤めているようです。文久2年（1862）から元治元年（1864）3月までは浅右衛門の子の源太郎が名主見習として勤めたようですが、8月からは須賀上耕地の渡辺惣七、須賀島耕地の中村喜左衛門、金剛寺耕地の中村伊八の3人の名主が慶応3年（1867）まで年番で名主を勤めていました。明治2年（1869）、5年には須賀島耕地の中村善太郎が、明治3年には共に須賀島耕地の中村源太郎と中村角右衛門が年番名主として確認できます。

岩槻藩領・旗本小笠原氏の須賀村の名主

岩槻藩領・旗本小笠原氏の須賀村の名主として最も古い名前は、正徳5年（1715）の須賀下耕地の渋谷庄右衛門です。庄右衛門は、延享2年（1745）まで名主として確認できます。その後、寛延3年（1750）から宝暦4年（1754）までは太郎左衛門が名主でした。

明和9年（1771）から文化14年（1817）には渋谷丈助が名主でしたので、数代に渡り世襲されたものと推定されます。文化14年（1817）には組頭であった権右衛門が名主として確認できます。文政3年（1820）の質地証文には組頭の須賀上耕地の渡辺常三郎と須賀下耕地の戸田源治郎のみで名主は記されていません。

その後、天保15年（1844）から嘉永6年（1853）には須賀上耕地の間宮平蔵が、慶応3年（1867）から明治3年（1870）には間宮太平治が名主として確認できます。いずれにしても、旗本小笠原氏の名主については、古文書が少ないため不明なところが多いといえます。

■ 笠原沼須賀村新田の名主

笠原沼須賀村新田では、元文3年（1738）には戸田政右衛門と渋谷庄右衛門が名主でした。政右衛門は旗本永井氏の須賀新田の名主で庄右衛門は旗本小笠原氏の須賀村の名主でした。その後、政右衛門は宝暦4年（1754）まで、庄右衛門は延享2年（1745）まで確認できます。その後、旗本池田氏の名主の中村浅右衛門が名主役となりました。浅右衛門は寛延元年（1748）から宝暦4年（1754）まで確認できます。寛延3年（1750）から宝暦4年（1754）までは太郎左衛門が認められます。太郎左衛門は庄右衛門に代わり名主役を勤めたと推定されます。

このように享保14年（1729）の新田開発以降、宝暦4年（1754）頃までは、須賀村の各領主の名主が兼務して、名主役を勤めていましたが、明和7年（1770）に笠原沼須賀村新田が天領から川越藩領となったことで独自に村役人が置かれるようになりました。川越藩領は文化4年（1807）に天領に戻りますが、それ以後も独自に村役人が組織されていました。

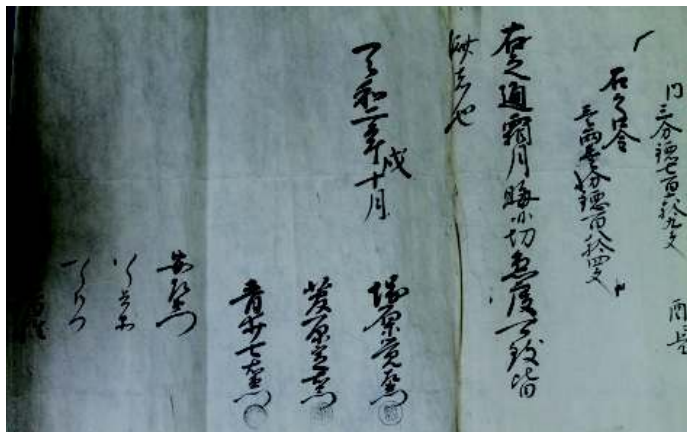
旗本池田氏の須賀村の組頭島村与五右衛門が笠原沼須賀村新田の名主として確認できるのは、明和9年（1772）から弘化5年（1848）までです。これらのことから数代に渡り名主役を勤めたと推定されます。

■ 旗本永井氏家臣青井七右衛門

青井七右衛門は旗本永井氏の家臣でした。天和2年（1682）の須賀村年貢割付状の差出人でした。この青井七右衛門の墓が中寺地区の観音寺に残っています。中寺地区の属する百間東村は須賀村と同じ旗本永井氏の支配でした。墓には「当所住」とありますので百間に住まいしていたことが伺われます。この他、東地区の五社神社の和鏡を奉納した人物として青井七右衛門が見られますので旗本永井氏の家臣として百間に陣屋がありそこで役所事務をしながら暮らしていたと考えられます。なお、陣屋の跡は不明です。



五社神社和鏡 青井七右衛門

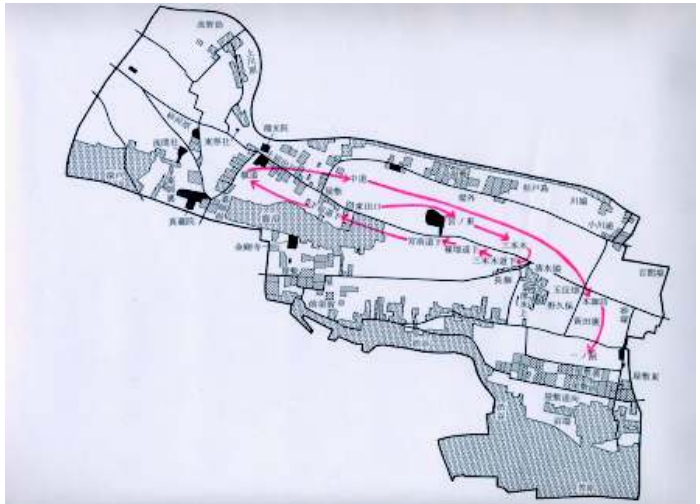


年貢割付状 戸田家文書 青井七右衛門の名前が記される

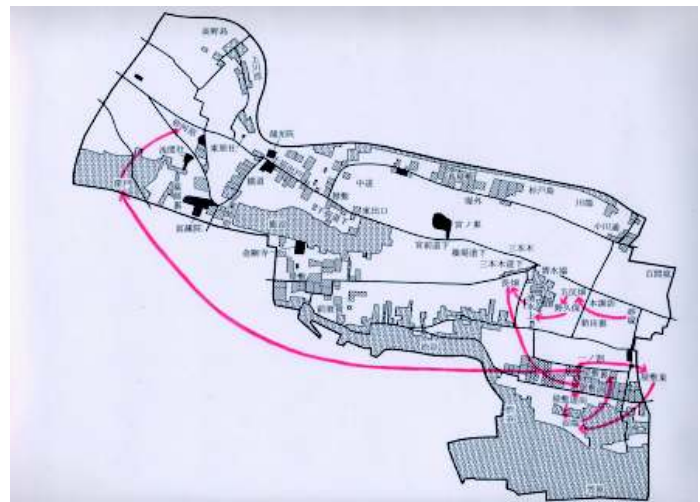
元和5年の須賀村の検地

服部権太夫政信が遠江国敷知郡（浜松市周辺）へ移されると、須賀村は天領となりました。そして、元和5年（1619）11月16日から、幕府の役人の牛田奎右衛門や丸山三郎左衛門等により四郎兵衛や勘解由等の案内で検地が始められました。初日は須賀下の東出口から身代神社周辺、そして下宿、横道、中道と須賀下、須賀上周辺の畑の検地を行い、辰新田の本諏訪、一ノ割方面も一部行いました。17日は昨日の続きで百間村との境である大境砂塚から五反畑、砂塚、野窪、清水上、長畑、屋敷前、屋敷向、沼端等の辰新田の畑の検地を、19日は堤外や杉戸島、川端、百間境の須賀島から河原周辺の畑の検地を、20日は金剛寺、前須賀、長畑の金剛寺周辺の畑の検地を行いました。

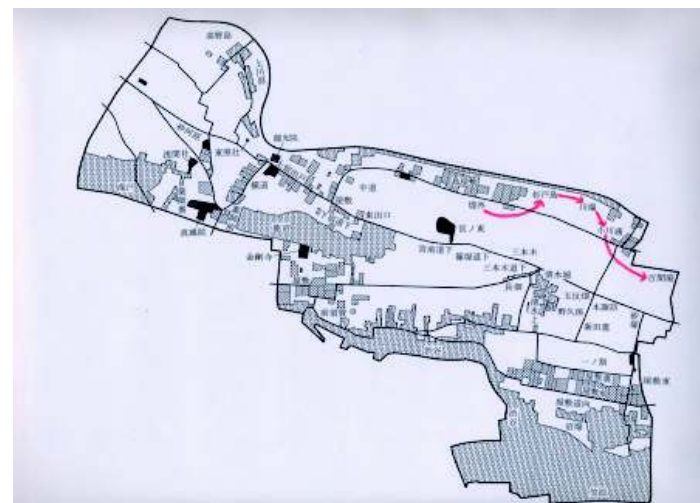
21日は深戸、鹿沼、前須賀、金剛寺、渋谷の須賀村の内、上手側の水田の検地を、23日は清水端から沼端と辰新田周辺の水田の検地を行いました。23日、次は上宿出戸から薬師前、薬師裏、深戸、砂河原、高野島の須賀上から高野島周辺の畑の検地を行いました。24日は須賀下、須賀上の屋敷、金剛寺の屋敷、島の屋敷、辰新田の屋敷の検地が行われました。計7日間で須賀村は全て検地されました。



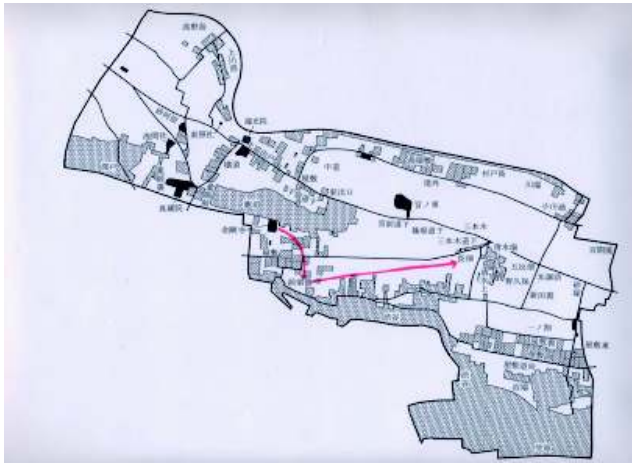
11月16日 畑（須賀上・須賀下、辰新田）



11月17日 畑（辰新田、砂河原）



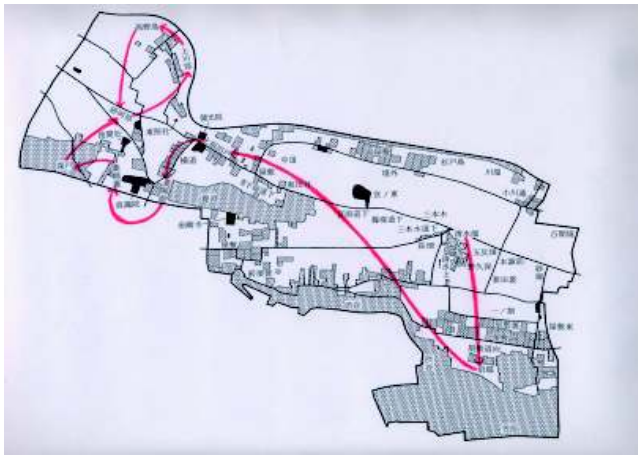
11月19日 畑（須賀島）



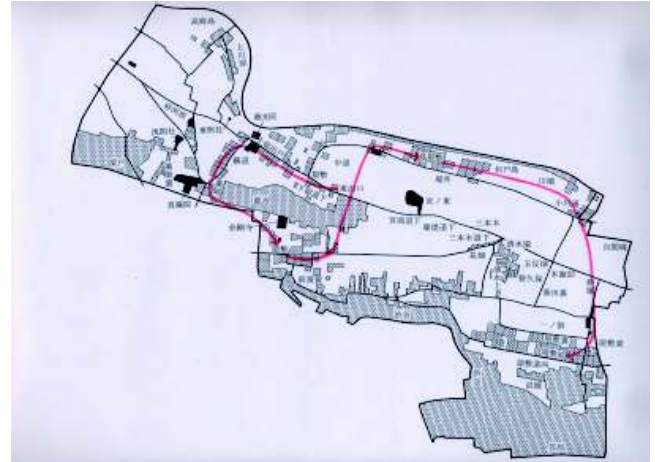
11月20日 畑（金剛寺）



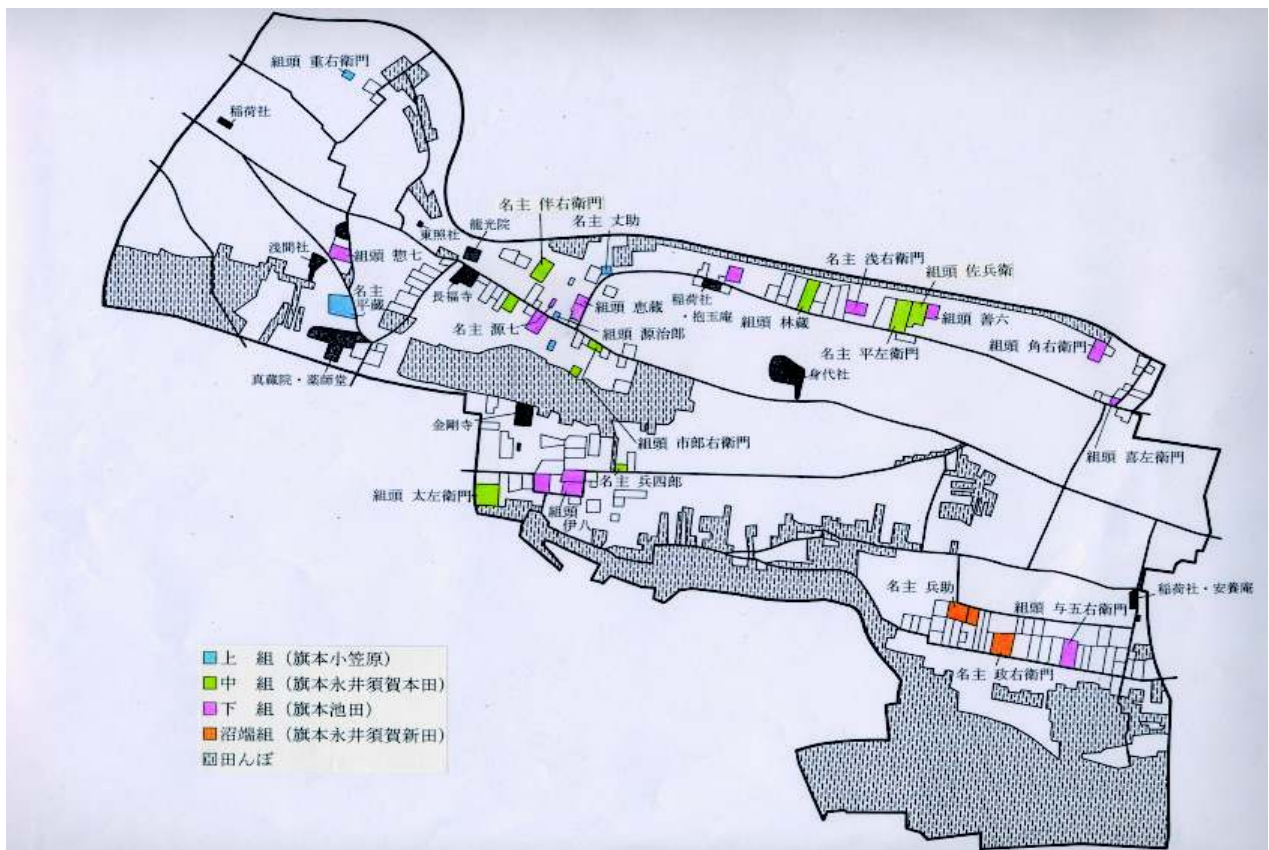
11月21日 田（金剛寺、鹿沼、深戸）



11月23日 田（清水上、沼端）畑（高野島）



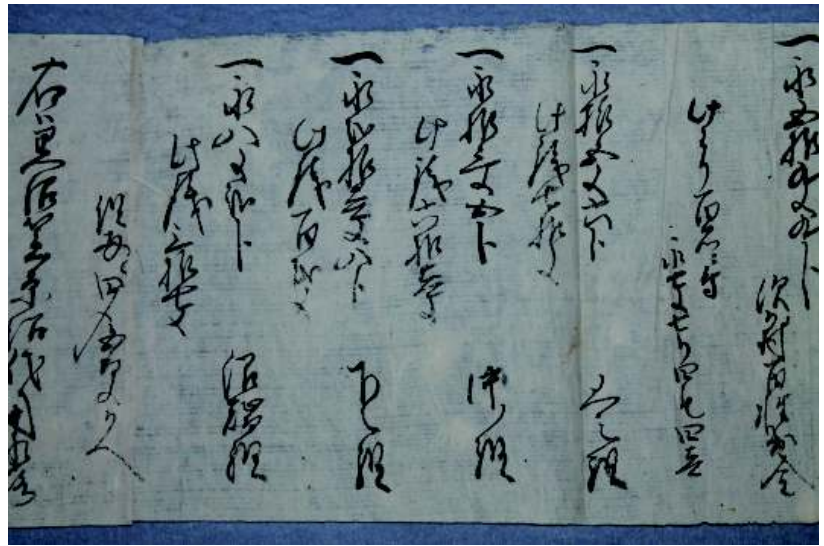
11月24日 屋敷（宿、金剛寺、島、辰新田）



須賀村 領主別図



須賀村新田検地帳 戸田家文書

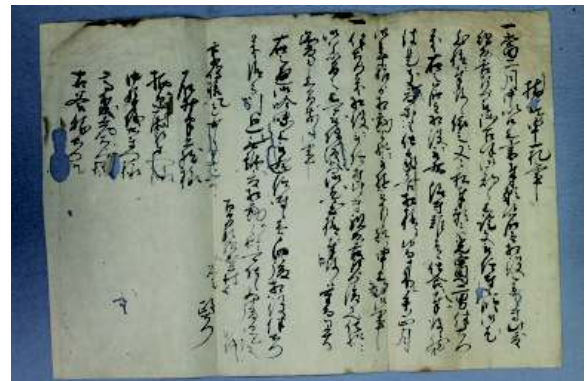


除堀分水普請入用割付状 戸田家文書

上之組、中之組、下之組、沼端組と記される。



地頭姓名等届書 戸田家文書



須賀村の村役人が分かる。 名主役交替一札 戸田家文書



百間村・須賀村絵図（須賀村部分） 岩崎家文書

須賀村の商い

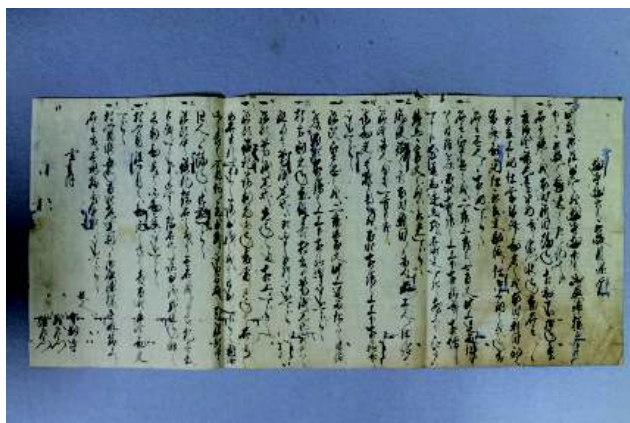
文政12年（1829）の史料によると、須賀村には125軒の家があり、その内41軒が農業の合間に商業や職人をしていたそうです。居酒屋は与八、九兵衛、治郎右衛門、藤蔵、湯屋が藤右衛門、伝六、喜右衛門、髪結屋は藤吉、煮物売家は亀次郎でした。

明治7年（1874）では医師が中村鎌斉、濁酒造りが中村久蔵、関口藤五郎、醤油造りが戸長である中村牧太郎、絞油屋が野口太七でした。

現在でもゲタヤやヤネヤ、トウフヤ、ムギヤ、ハコヤ、コウヤ、アブラヤ、ユヤ、オケヤ等の屋号が残っています。

須賀村の出来事

須賀村ではいろいろな出来事がありました。須賀新田村の伊兵衛は生活が苦しかったため、娘のいちを龍光院に奉公へ出したところ、年季を勤めず喜右衛門と駆け落ちしたことや三次郎の三男藤五郎が幸手宿で召し捕えられたことなども記録に残っています。この他、旗本永井氏の須賀本田と須賀新田の村方争論などもありました。殿様であった旗本永井氏が名主の権兵衛に金子15両を借りていることも分かります。また、組頭の吉兵衛が長男の吉兵衛と次男の勇次郎に遺産相続する記録も残されています。人々の日々の生活で記録に残るのは問題があった時だけですので、これらの古文書が残ったのでしょう。

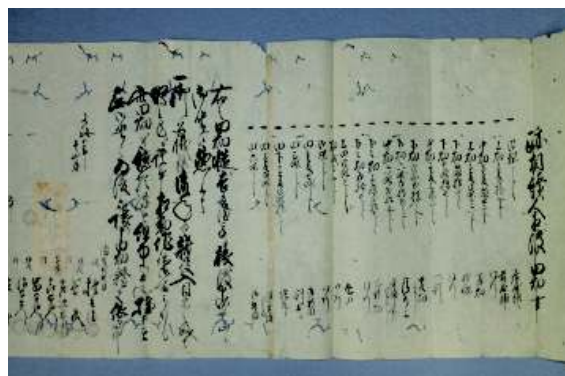


拙寺拙者共取扱目録覚 戸田家文書



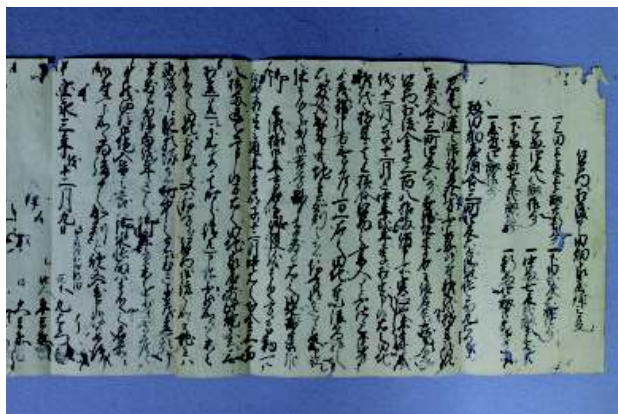
娘欠落到付訴状 戸田家文書

娘のいちが喜右衛門と駆け落ちしたことが記されています。



田畑譲渡証文 戸田家文書

権兵衛が跡目相続人である長男の吉兵衛に田畑や屋敷を譲り渡しています。



質地証文 戸田家文書

宝永3年（1706）の質地証文には旗本永井氏の名主加右衛門、名主九右衛門、名主安太夫、組頭市兵衛、組頭重兵衛が見られます。この古文書の内容は旗本永井氏の須賀新田名主の須田九右衛門が、八左衛門島の戸田権兵衛に屋敷や田畠と共に名主役を質に入れたものです。名主の交代を含む質入れという、非常に重要な内容であったため、旗本永井氏の他の2名の名主を含め、村人30人全軒が印を入れたと推定されます。正徳2年（1712）には権兵衛が名主を勤めているため質流れしたようです。こうして、名主役が異動することがありました。

須賀村の寺院と神社

須賀村には字辰新田に稲荷神社、字下堤に身代神社が、字下堤外に稲荷社が、字上堤に東照社と稲荷社が、字砂河原に浅間社がありました。しかし、字辰新田の稲荷社は浅間社や辰新田集会所となり、字下堤外の稲荷社も場所が変わり、字上堤の稲荷社、東照社、字砂河原の浅間社は廃社となりました。昔のまま残っているのは身代神社のみです。

須賀村の寺や庵としては字宿に龍光院、字金剛寺に金剛寺、字鹿沼に長福寺、字深生戸に薬師堂と真蔵院、字辰新田に安養庵、字下堤外に抱玉庵がありました。現在、龍光院は廃寺に、抱玉庵は廃庵に、安養庵は辰新田の集会所となっています。



真蔵院 本堂



真蔵院 薬師堂



真蔵院 仁王像



金剛寺



長福寺



龍光院跡



安養庵



身代神社



身代神社 本殿



稲荷社跡（下堤外）



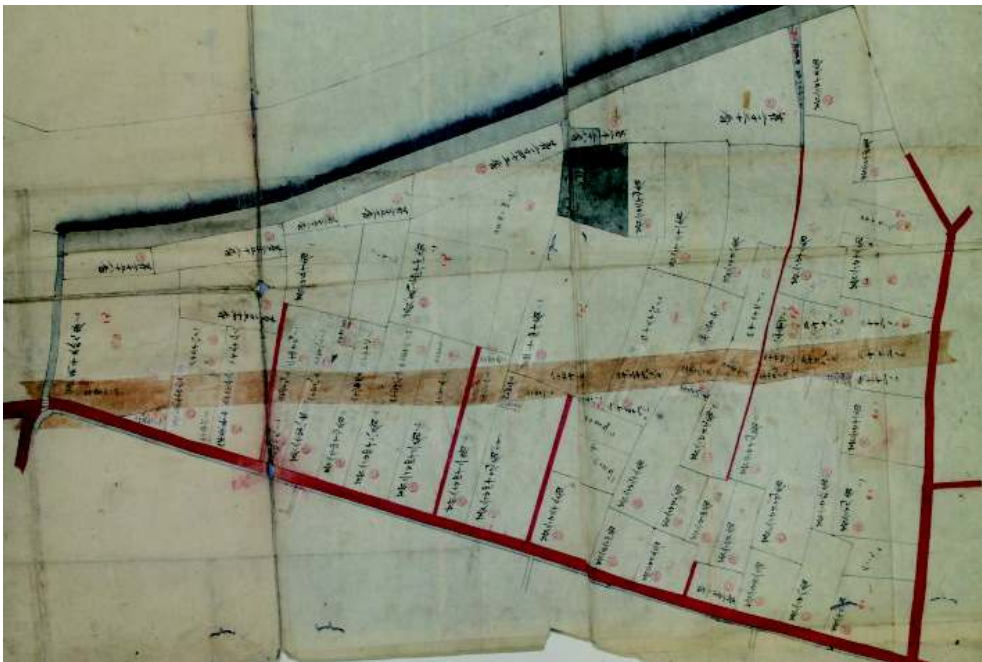
浅間社跡

■ 明治以降の須賀

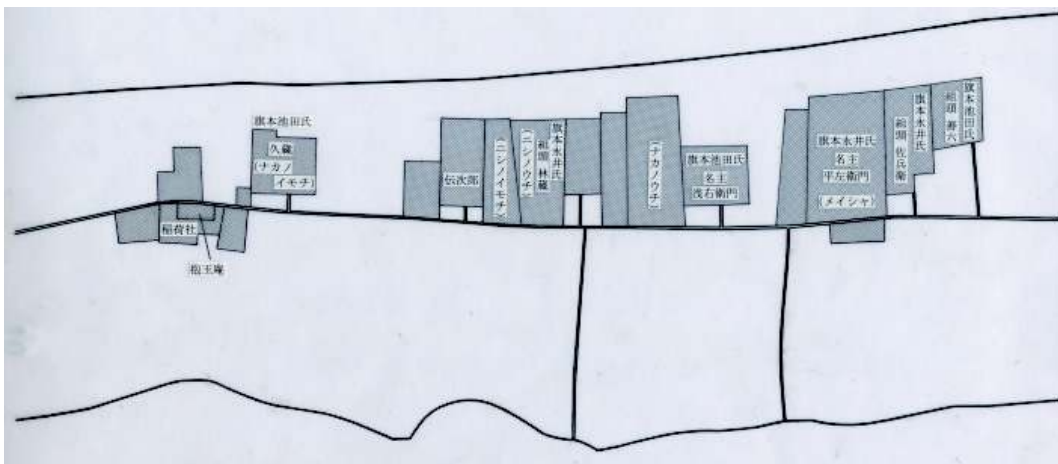
須賀村は大きく分けて旗本小笠原氏、旗本池田氏、旗本永井氏の須賀本田、旗本永井氏の須賀新田の4つの村に分けられていましたが、明治維新になるといずれも同じ大宮県（のち浦和県）第7区に属したことにより合併します。この時の石高は830石余りで家数は130軒でした。そして、浦和県は岩槻県、忍県と合併し、明治4年（1871）11月14日埼玉県が誕生します。その後、明治8年には辰高入須賀村新田、笠原沼須賀村新田、笠原沼下野田村新田を編入します。

明治22年には東条原村、西条原村、国納村、和戸村と合併し新しい須賀村となりました。当時の村役場は西条原の宝光寺にありましたが、明治40年に国納字丸屋（和戸駅西口付近）に移転し、更に大正3年（1914）、現在の和戸公民館に移転しました。学校は当初、東条原の旧大聖院跡で西条学校として開校しましたが、久米原小学校と改称し、大正5年、現在の須賀小学校の地に移転しました。

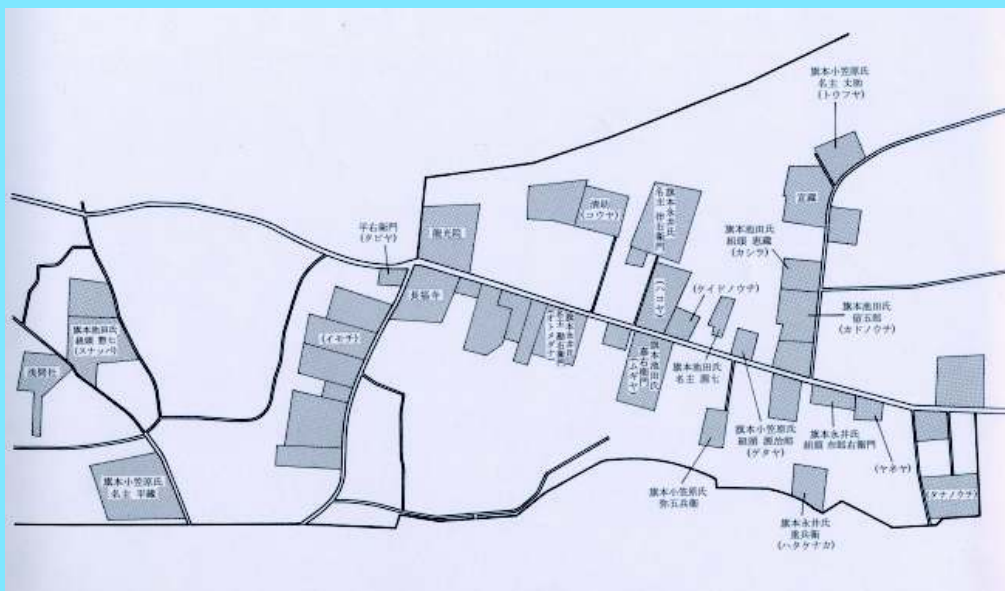
昭和30年7月20日、須賀村と百間村は合併し宮代町が誕生しました。



宿耕地地籍図



島耕地屋敷図



宿耕地屋敷図



辰新田耕地屋敷図



金剛寺耕地屋敷図

発行 宮代町郷土資料館
住所 南埼玉郡宮代町字西原 289
TEL 0480-34-8882
FAX 0480-32-5601
<http://www.town.miyashiro.saitama.jp>